

復興支援－久慈港より

平成 23 年 9 月記

神戸支部（震災復興支援室兼任）

テクニカルエキスパート 坂口剛

4 月 21 日に神戸を離れ仙台での災害業務研修後、4 月 25 日に岩手県久慈港に着任して早くも 4 ヶ月が経ちました。着任時には、津波被害が主に港湾地区だったのと震災後 1 ヶ月半経過していたこともあり、地震あるいは津波の影響で被災した場所以外では表面上、通常生活のように見え、人の遅しさを感じました。5 月上旬に久慈市に隣接する野田村に行ったの時の光景は、久慈港とは違い堤防が完全に倒壊し、三陸鉄道のレールや多数の民家が流された一帯があり、思わず絶句しました。阪神淡路大震災の時も感じましたが、テレビで見る光景と実際に目にするとではあまりにもギャップが大きく、自然災害の猛威が途轍もないものだと改めて感じました。同時に津波に対する恐怖感を改めて持ち、大きな揺れがあった場合には、何はともあれ高台に避難せねば、という意識が高まったのを今でも覚えています。

業務は、まず災害査定資料作成補助を行いました。査定資料のうち査定報告書、査定調書については久慈港出張所職員の方に作成してもらい、自分は被災前図面と別途発注の被災状況報告図面を基に、数量計算書の作成と概算工事費の算出及び積算の考え方の根拠資料の作成、並びに復旧工程(案)の作成を行いました。数量計算、積算、工程(案)の作成を 1 人でやらなければいけなかったのですが、久慈港の査定件数は、湾口防波堤(北堤)と作業基地波除堤の 2 件と他港に比べ比較的少なかったこと、現地査定が 6 月中旬であったこと、それと久慈港は比較的電子データがあったため、何とかやれたのではないかと思います。

7 月中旬、宮古港へ応援に行く機会がありました。久慈港では沈下の影響はほぼなかったのですが、宮古港は約 60cm も沈下があり、原形復旧では高さが足りないため、施設に応じて断面を変えたりする作業や査定件数が多いため、少ない時間でどう査定資料作成を素早くするのかといったことについて、自分自身の経験として良い機会を与えてもらえありがたく感じました。

災害査定資料の作成が終わっても、現地査定後に質問や追加資料の作成及び資料修正がありました。査定関係が終われば、次は発注補助の準備です。発注ロットの検討が数パターンあり、パターン毎に荒い概算金額を算出し、ある程度方向性が見えれば、それに合わせて発注用の数量計算書、図面の作成等といった作業を、現在はしています。